書評と紹介

Maurice Lombard,
L'évolution urbaine pendant le haut moyen âge.
Annales (Economies, Sociétés, Civilisations), 1597

「モーリス・ロムバールは、年来、《イスラム地中海世界(八—十一世紀)、経済的研究》について、きわめて注目すべき問題提起をなしている。同時に、彼は中世前期の経済史についての研究をもつづけている。」一九五六年に物故したルシアン・フェーブルは、かつてロムバールについてこのように語ったが、彼が、L'or musulman du VIIe au XIe siècle, Annales, 1947 および Mahomet et Charlemagne, Annales, 1948. において、いわゆるピレンヌ理論に挑戦し、イスラムの進出は、ピレンヌの見解とは逆に、ヨーロッパにおける商業交易を発展させたと主張したことは、すでに周知のとおりである(拙稿「いわゆる商業ルネッサンスについて」史学雑誌六四の八、平城照介「ピレンヌ・テーゼ批判」学園論集二参照)。ここで取り上げた表記の論稿は、その後、彼が、一九五一年三月、トゥールーズ大学におけるマルク・ブロック記念会のさい報告した原稿に手を入れたもので、目下執筆中の Les Villes du haut moyen âge et le Rythme urbain の梗概にすぎないが、このような立場をさらに発展させ、単なるピレンヌ批判というよりも、あらたに、ヨーロッパ中世前期の都市発展を問題の中心に据えた点で、彼のユニークな構想の全貌をはじめて明らかにしたものということができる。以下、その大要を要約し、若干の問題点を指摘してみたい。

× ×

従来、中世前期の都市問題についての研究は、ほとんど北西ヨーロッパに集中し、その上限は、三世紀のローマ帝政の危機とともにはじまる古代都市の衰退に、その下限は、十、十一世紀における古代のものとは全く異質的な中世都市の成立におかれてきた。従つて、われわれの問題もまた、西欧における古代都市から中世都市への移行が、何ゆえに、いかにしてすすめられたか、西欧における都市衰退と復活の時点はどこに求められるか、三世紀から十一世紀への都市発展の曲線をどのように辿るか、に向けられなければならない。

けれども、都市発展の曲線、その年代、その地理的関係を取り扱うさい、先ず、狭い西欧的視野から離れる必要がある。ピレンヌのあやまりも、この点が充分でなかつたことにもとづく。考察を西欧側史料に限り、西欧側関係史料の断絶をもつて、西欧とオリエントとの関係の断絶を結論したからである。

さらに、これも、同じくピレンヌのあやまりであるが、イスラムの進出をもつて、ただちに西欧都市の衰退を云々するような、現在の経済理論の軽そつな適用を慎まなければならない。近代経済学者が方法上の問題で歴史学に大きな寄与をなしたのは当然としても、ニューヨークの事件がただちにパリーやロンドンに反応する現在と、中世前期とでは、事態が全く異なつていることを忘れることはできない。この点で、歴史家は経済学者のみならず社会学者との協力を要請されるわけであるが、ここでは、さしあたり、われわれの研究にも役立つ公式の一つとして、貴金属の流入および流通貨幣量の増加と都市発展の間に

存在する密接な関連に注目したい。これこそ、中世前期における都市発展の年代的経過、地理的関係、様式を全体的に明らかならしめるものと考えられるからである。

第一期（三―四世紀）ローマ西方における都市の衰退と帝国東部における都市の発展

André Piganiol は、三、四世紀の都市の衰退は、ゲルマン民族の進入とローマ政府の搾取にもとづくと説明する。ラインおよびドナウ地方のローマ軍団の撤収、二五三―二六八年のフランク、二六八年のアラマン、二七〇―二七一年のスエビの進出にはじまる前者が都市を経済的に破壊し、皇帝および官僚による後者は、都市民の逃散を惹き起して都市を社会的に破壊したと考える。

けれども、コンスタンティノープルの創設に見られる帝国東半部の都市発展を考慮に入れるとき、かかる分析は必ずしも妥当しないし、三世紀以後の都市の衰退を一般的現象とすることもできない。このようにして、われわれは、ローマ西方の都市衰退とローマ東方の都市発展を説明する共通の原因を、西欧とオリエントの金貯蔵量の不均等な分布、西欧における貨幣流通の縮少、オリエントにおける貨幣流通の拡大に求めざるを得ない。三世紀におけるパルティア王国の没落、ササン朝ペルシア王国の勃興の結果、オリエントでの活動を抑制されたギリシア人、エジプト人、シリア人などのいわゆるレバント商人が、以後、珍奇な東方物資の販路を西方に見出して、西方からの金の流出、ローマ東方への金の流入を激化したのは、その直接の契機となるものであった。

第二期（五―七世紀）ゲルマン西方における都市衰退の強化、ビザンツ帝国における都市活動の沈滞と後退、ササン東方における都市発展。

五世紀のゲルマンの大移動は、すでに衰退期にあった西方諸都市に、再び大きな打撃を与えた。けれども、かかる動乱のなかで、都市の再建を不可能ならしめたのは、金の大規模な退蔵およびオリエントとの入超貿易の続行による、流通貨幣量のいちじるしい減少であった。もともと、ローマ盛期には、消費都市ローマに対する重量品供給によって発展した西方商業は、もはや昔日の栄を取りもどすことはできなかった。金の流出、オリエントのぜいたく品輸入の形で辛うじて維持されたそれは、六世紀末には、はやくも全面的休止の悲運に到達せざるを得なかった。六世紀末から七世紀はじめにおける西方諸都市の完全な衰退、イングランド、ガリア、スペイン、イタリアの農村化、アフリカの遊牧化は、その当然の帰結であった。

西方ほどのことはないにしても、六世紀後半から七世紀はじめのビザンツ東方においてもまた、都市活動は沈滞し後退した。コンスタンティノープル、テッサロニケ、アレクサンドリア、シリアの海岸部、小アジアのエーゲ海側を除けば、農村化あるいは遊牧化がかなり顕著であった。そして、この場合もまた、それは、究極的には、貨幣流通の縮少に起因するものであった。ウラルやヌビアの金のビザンツへの輸送路が遊牧民族によって中断されたこと、西方からの金貨の流入が止まったこと、ビザンツ帝国内でも金の退蔵現象がすすんだこと、ササン帝国が印度洋と地中海を結ぶ商業路を扼したことは、その直接の契機であった。

ササン帝国の発展はビザンツ帝国やゲルマン西方と全く異っていた。イランやメソポタミヤのオアシス地方では、灌漑の発展とともに

に、椶櫚樹、果樹、稲、甘蔗糖、綿の栽培など、いわゆる集約農業がさかんとなり、それが、大都市集落の存在、上からの多数の都市建設を可能ならしめた。都市における商工業者 Hûtukhsh の躍進はいちじるしく、他方、土地所有貴族 dihqâns は急速に没落した。そして、このような発展は、全く、ドラクマ銀貨 dirhem の広汎な流通にもとづくものであつた。金は退蔵されることが多かつたとしても、スサで発掘されたホスロー二世（五九〇―六二八）時代のドラクマ銀貨から知られるように、当時、銀貨の鋳造所は帝国のほとんど至る処に在り、これらの銀貨の流通は、帝国内部のみならず、南東や北西にも及んでいた。

第三期（七―十一世紀）イスラム世界における都市発展、ゲルマン西方における都市復活の第一歩、ビザンツにおける都市発展

エジプト・パピルスから知られるように、イスラムの進出とともに、各地の事態は一変した。もつぱら都市は居住したイスラム教徒が、非イスラム教徒から一様に人頭税と地祖を徴集して、農村における既存の荘園秩序を破壊しただけでなく、流通貨幣量の増加、インフレの昂進によつて急速に富んだ都市の商人層が、さかんに土地投資をすすめた結果、農村は都市の食糧、労働力供給源となり、七―十一世紀のイスラム世界の都市発展は、ローマ帝国や十三世紀の西欧におけるそれに比肩すべきものとなつた。イスラム征服前から都市発展のいちじるしかつた旧ササン帝国領（イラン、メソポタミア）から、旧ビザンツ帝国領（シリア、エジプト）を経て、西方諸地方（アフリカ、イスパニア、シシリー）へと、かかる機運は全イスラム世界に及んだ。旧ササン領の Koufa, Bassora, Bagdâd, Samarra, Magadixo, Barawa, Kilwa, Mélinda, Mombassa, 旧ビザンツ領の Damas, Alep, Foustât, Al-Askar, Al-Qata'i, Al-Qâhira, Le Caire, 西部地中海の Kairouan, Tunis, Mahdia, Tahert, Jlemcen, Fès, Alger, Qala'a (Benî Hammad), Marrakech, スーダンの金の集積地としての Sidjilmâsa, Quargla, Mzab 諸都市、Ghadamès, Awdaghost, Tadmekka, Tombouctou, イスパニアの Cordoue, Tolède, Saragosse, Séville, Malaga, Almèria, Madinat az-Zahrâ, Madinat az-Zâhira, シシリーの Palerme などが、あるいは復活し、あるいは新設された。

これらのイスラム諸都市の人口を正確に知ることは困難であるが、七、八階建のブロック住宅が二五〇―三〇〇ぐらいの人口を収容したことから算定すると、九世紀末および十世紀の Bagdâd が百万以上、DamasやCordoue が三、四十万、Le Caire が五十万位で、精々三、四万にすぎない十三世紀の北イタリアやフランドルの都市とは、雲泥の差があつた。都市の本質はあくまでも経済的機能にあつた。中央には商工業街 soûq が走り、その両側には、旅館 fondoûqs, 倉庫 Kaisaria, 取引場 soûq as-saghâ, 鋳貨所 Dar as-siqqa があり、中心部にはモスク（寺院）があつた。住民構成もきわめて雑多で、人足、職人、仲買人、大商人などが商工業街に雲集していたほか、当時すでに、下層民の叛乱もしばしば起つた。そして、このような都市の強力な発展が、何よりも、金の流入と貨幣流通の強化、退蔵金の再流通、金山の開発にもとづくのは当然であつた。東部からの人口移動、イスラム西方すなわち Maghreb の繁栄も、スーダンの金山に支えられたものであつた。

このようにして発展したイスラム諸都市の購買力は、ゲルマン西欧のみが供給し得る奴隷、船舶用木材、鉄、武器、錫、毛皮などを欲求することによって、九、十世紀のゲルマン西方に、金の流入、商業の発展、都市の復活を惹き起した。西欧都市の復活は決して十二世紀の現象でなく、その端緒は、イスラムの金が mancus の形でゲルマン西方に流入しはじめた、八世紀末、九世紀はじめにあつた。Amalfi, Naples, Gaetë, Venise などのイタリア都市の発展は、かかる事態にもとづくもので、それが、次第に、ソーヌ、ミューズ、ライン、フランドルの諸地方にも波及した。しかも、他方において、このようなイスラム世界からの影響は、地中海を通らずに、Bagdâd から、ヴォルガ河、バルティック海、中央ヨーロッパなどを経ても、ライン、フランドル地方やイングランドに到達した。その途次にあたるロシアの諸河川、バルティック海沿岸におけるイスラム貨幣の出土、Itil, Boulghâr, "Ville des Bourtâs", Novgorod-la-Grande, Kiev の繁栄はこのことを物語る。北西ヨーロッパにおける商人定住地 portus, Vic, vicus の発展も、このようにして、この地域には、東西両イスラムからの貨幣流入が合一していたからであつた。

丁度同じころ、ビザンツにおいても、のちに十、十一世紀のビザンツ美術の第二の黄金時代となつて開花する、同じような復活がはじまつた。イスラムの金がゲルマン西方に流入した結果、ビザンツ自身で生産されあるいはビザンツの仲介するぜいたく品は、再び、西欧に有力な販路を見出すことができたし、このことによつて、ビザンツが、イスラム世界から、香料、香水、生糸、象牙、真珠、宝石などを購入することも可能となつた。いわば、ここに、イスラム東方からイスラム西方へ、イスラム西方からゲルマン西方へ、ゲルマン西方からビザンツへ、ビザンツからイスラム東方へと、貨幣および都市の回路が完成されたのである。従つてまた、中世前期の都市発展は、地理的にも年代的にも、まさしく貨幣発展に相応じることが、ここであらためて確認されなければならない。

× ×

わずか二十二頁のなかに盛り込まれた豊富な内容を、どのていどまで正確に伝え得たか疑問であるが、以上で紹介をおわることにする。本格的批判は、いずれ、ロムバールの著作の完成を俟たなければならないが、ここでは、彼の雄大な構想の基本的前提について、若干の問題点を指摘しておきたい。

一、総じて近代以前の商業が多分に遠隔地商業として発展している以上、中世前期における西欧都市の発展を論じるにあたり、ビザンツ、イスラムをも含んだ超西欧的な視野が必要なのはいうまでもない。この点で、ロムバールのピレンヌ批判の意義を過小評価することはできないし、かかる立場に、いたずらに流通主義的というレッテルを貼つて、それを頭から拒否することはつつしまなければならない。

二、もちろん、この場合、チポルラ (Carlo M. Cipolla, Encore Mahomet et Charlemagne, Annales, 1949) が指摘したように、単なる史料的、文献学的方法によつて、商業の存在を云々するだけでは、問題は片付かない。ロムバールが、現在の経済理論の軽そつな適用を戒心しつつも、貨幣発展と都市発展の相関々係を主張したのも、おそらくは、経済学的方法の適用を強調したチポルラの批判を考慮してのことであり、少くとも中世前期

の経済発展を問題にするかぎり、ロムバールの主張の正しさを必ずしも否定することはできない。さらに、イスラムの進出が、フィッシャーの公式 $P=\frac{MV}{Q}$（P=価格水準、M=流通貨幣量、V=貨幣流通速度、Q=市場に投入されるべき財貨および用役の量）における諸関係を修正したか否か、とのチポッラの問題提起に対しても、ロムバールの所論はあるていどの解答を与えているとしなければならない。（この点で、チポッラの近著 Money, Prices and Civilization in the Mediterranean World, 1956 もまた、ビザンツ、イスラム、フィレンツェ、ヴェネツィアの金貨が、それぞれ、ある時期には国際通貨となつたのは、当該時期における商工業の躍進にもとづくとしたのは興味深い。——西洋史学36拙稿参照）

三、しかしながら、貨幣発展と都市発展の相関々係を否定することはできないにしても、イスラム世界からの金の流入に対応して西欧都市が発展するためには、当時の西欧特有の社会経済的諸条件の存在することを見逃せない。従つて、イスラム都市の人口数と西欧都市のそれとを漠然と比較して、人口規模の大きい前者の経済発展を強調するロムバールの所論は、事態の本質を見あやまつているとしなければならない。けだし、別の機会（拙著「ヨーロッパ封建都市」創元社刊一五四—一六六頁）に指摘したように、都市の人口規模の拡大は、多分に政治的条件にもとづくもので、西欧都市の人口数が一般にそれほどでもないのは、必ずしも、西欧都市の経済的後進性を指途するものとはならないからである。この点で、超西欧的な貨幣経済の波のなかで、西欧都市がいかにして発展したか、西欧自体の内的諸条件が、今後究明されなければならない。

四、さらに、このことに関連して、地中海域は別としても、イスラムからの金の流入がどのようにして西欧全般に滲透したか、その具体的転機を明らかにする必要がある。かつてわたくしが指摘したように（前掲拙稿）、北西ヨーロッパの都市発展において、少くともその成立期に関するかぎり、イタリアの影響は認められず、そこでは、ノルマン経済圏への対応が直接の問題になつているとすれば、西欧都市の発展が、究極的には、イスラムからの金の流入にもとづくとするだけでは充分でない。ロムバール自身も認めた、現在とは全く異つた当時の経済的条件下において、必ずしも現実のイスラム貨幣が西欧全体を席捲したわけでないのに、何ゆえに、西欧における都市発展の究極的原因をイスラムからの金の流入に求めなければならないか、あらためて問わなければならないからである。

——鯖田　豊之——

笠原一男著
親鸞と東国農民

真宗教団史、特に一向一揆の研究で名のある著者は、近来、親鸞の研究に没頭しその成果は、「東国における念仏禁止の必然性と親鸞の帰洛」（日本歴史九六）「東国における真宗の発展とその社会的基盤」（歴史学研究一九八）「親鸞における謗国思想の意義と限界」（史学雑誌六五—一〇）「教行信証の成立」（封建社会における真宗教団の展開）となつて発表されている。本書はそうした成果を手ぎわよくまとめたものである。然もこれは、著者の